龍をかえしに

森水陽一郎

登場人物

荒木宮子（６３）　洋食店おかみ
荒木竜太（２８）　宮子の息子
吉田（５６）　医師
ウタ（８０）　謎の老婆
ユキヨ（６０）　定食屋店主

（５９４１文字）

○病院・診察室

吉田医師（５６）の話を聞く、患者の荒木宮子（６３）。

うろたえつつ、困惑して、

宮子「そない悪いんですか？」

吉田「油断はできません。貧血も出てますし、前回より、クレアチニンの数値も上がっています」

宮子「クレアチニン？」

吉田「はい。端的に言うと、腎臓の働きが弱まっています。手助けをする透析が、近いうちに必要となるかもしれません」

宮子「そんなん、急に言われても」

吉田「怖がらせてすみません。まず、ご家族で話し合いをされてから、将来的な移植まで見すえた、今後の治療方針を――」

○洋食店『たっちゃん亭』・店外

「準備中」の札。

ドアの前に立つ宮子。神妙な面持ち。

気持ちを切り替えて、ドアを開け、

宮子「ただいまー」

○同・店内

年季の入った、レトロな内装。

オープンキッチンで仕込みをする、息子の竜太（２８）、顔を上げ、

竜太「どないやった？」

宮子「夏バテらしいわ。余命三日やって」

竜太「なんや、心配して損した」

宮子、キッチンに入り、冷蔵庫を開ける。
炭酸の缶をつかむが、ふと手をとめ、お茶のペットボトルをつかみ直す。
竜太「夜、出れるんか？」
宮子「私の代わり、誰がおるんよ」
お茶をグビグビ飲んで、
宮子「はー、生き返った」

○同・店内（夜）
十五名ほどの客で満席。
キッチンで奮闘する竜太。
ハンバーグの盛りつけを仕上げ、
竜太「６番さん、お願いします」
宮子「はいな！」
熱々の鉄板皿をテーブルに配膳。
別のテーブル席から、
客Ａ「宮ちゃん、お水ちょうだい」
宮子「はいはい、ただいま」
別テーブルから、空グラスを掲げ、
客Ｂ「生中、追加で！」
宮子「はーい、おおきに！」
＊　＊　＊
閉店間際、最後の客の会計。
宮子、おつりとレシートを渡して、
宮子「いつもありがとね」
客Ｃ「竜太、ごっそさん」
厨房の竜太に伝え、扉に向かう。
客Ｃ「（扉を開け）うわっ」
人がいて驚き、脇を抜けて退店。

戸口には、紺の宮古上布（じょうふ）をまとった、
小柄な老婆、ウタ（８０）
宮子「すんません、もう閉店で」
ウタ、するりと店内に。
あたりをうかがって、
ウタ「おるね、うん、おる」
宮子「はい？」
ウタ、テーブルの下を順にのぞく。
ウタ「巣ごもりかなぁ、うーん」
宮子、ちらっと竜太をうかがう。
厨房の竜太、首を横に振る。
ウタ「おるけど、おらんねえ」
食後の皿をひょいと持ち上げ、確認。
宮子「あの、何かご用で」
ウタ、宮子に目をとめる。
まぶしげに目を細め、しばし凝視。
ウタ「そっか、うん、立ちふさいどるか」
すっと宮子に近づき、竜太を一瞥。
ウタ「息子さん？」
宮子「はあ、そうですけど」
ウタ「知っとって？」
宮子「何がです？」
ウタ「曇天（どんてん）の龍」
宮子「はい？」
ウタ「薄曇り。龍が、とぐろ巻いとる」
宮子、ふと思いあたる。
すぐにごまかして、
宮子「あっ、いやぁ、龍ですか？」
ウタ「うん、ぼちぼちしょったら、食われる
よ、あんた。手ぇ、見せてみ」

返事を待たずに、宮子の右手をそっと
下からすくい、手のひらを見る。
ウタ「流れとらんね、うん」
自身の手を、そっとかぶせる。
軽くなで、手を離すと、そこにうっす
らと、泥状の汚れが残っている。
宮子「（驚いて）えっ」
ウタ「匂てみ」
宮子、手のひらを嗅いで、顔をしかめ、
宮子「何です、これ」
ウタ「何ですいうて、あんた自身のもんや」
宮子「私？」
ウタ、うなずいて微笑み、
ウタ「だいじょぶや、まだ手遅れちゃう」
宮子「あの、それって――」
ウタ、小さく首を振り、
ウタ「大阪来て、五十年。感じるだけで、よ
う見えんようなってる。力も、弱ぁなって
る。どないかできたらええけど、そやな、
五日、それが無理やったら、三日、休んだ
らどうや」
宮子「この店？」
ウタ「店もそうや。それにあんたも」
厨房の竜太、我慢しきれずに、
竜太「おばあちゃん、さっきから何の話――」
宮子「ちょっと黙って。（ウタに）休むんは、
できますけど、温泉かどっかに行け、いう
ことですか？」
ウタ「どやろ。温泉では、その泥は落ちんな。
汚れと匂いは消えても、うーん、とぐろが

なぁ」

宮子、手のひらの泥を指でこする。

汚れがとぐろ状に、薄く残る。

ウタ「目ぇつむって、回ってみ」

宮子「えっ？」

ウタ「その場で、ぐるぐるって」

宮子「はあ」

困惑しつつも、目をつむり、ゆっくりと回り出す。

ウタ「ここや、と思たところで、とまり」

宮子、しばし回り、ふととまる。

目をあける。正面にウタ。

ウタ「（うなずき）南や」

宮子「南？」

ウタ「そう。風は南に吹いとる。私にわかるんは、ここまでや。ほな、あんじょう気ばりや」

くるりと背を向け、戸口に。

宮子「あっ、ちょっと」

後ろ手を振り、店外に消える。

竜太「なんやあれ。塩まこか？」

宮子「いや、やめとき」

竜太「でも変なこと言うてたで。薄曇りの、龍がなんやとか」

宮子「神さんや」

竜太「えっ？」

宮子「龍神の、使いや」

○荒木家・リビング（夜）

竜太、テーブルでパソコンを操作。

『南　離島　泥　神龍』の検索ワード。
そばには宮子。画面を凝視。
宮子「ちょ、ちょっとこれ、アップアップ」
竜太、マウスを操作。画像拡大。
画面に、宮古島のパーントゥの光景。
全身泥だらけの、仮面をつけた神が、
厄払いをかねて村を練り歩く画像。
宮子「うわぁ、泥だらけや」
竜太、画像の説明を読み、
竜太「パーントゥ、宮古島の祭やな」
宮子「龍はおらん？」
竜太「うーん、ちょっと待って」
『沖縄　龍　神話　守り神』で検索。
検索結果や画像をしばし見て、
竜太「沖縄本島が多そうやな」
宮子「いや、宮古島や」
竜太「なんでわかるん？」
宮子「なんでって」
手のひらをヒラヒラさせ、
宮子「洗っても取れん、この匂いもそう。それにおかあちゃん、名前宮子やないの」
竜太「なんやそれ。行きたいだけやろ」
宮子「ご名答！」
利口な犬でも褒めるように、髪をくしゃくしゃに。
竜太、大げさに手で払い、
竜太「（マウスを操作）宮古島なあ。ん？これ、さっきのおばあちゃんの着物や」
画面には宮古上布のシックな着物。
販売ページをひらいて、

竜太「うぁ、めちゃくちゃ高いわ」
宮子「どれにしょっかな」
竜太「やめい」
　ページを閉じ、電子マップをひらく。
　スクロールして、宮古島を徐々に拡大。

○宮古島・俯瞰全景
　宮古ブルーの海に囲まれた島。

○同・国道
　田舎道を走るレンタカー。

○走行中の車内
　竜太、運転しつつ、
竜太「竜宮城展望台？」
宮子「そう、いかにもやろ？」
竜太「いかにもすぎるな」
　宮子、カーナビを確認して、
宮子「そろそろやで」
　視界がひらけ、前方に来間（くりま）大橋。
　海に向けてまっすぐ伸びる。
宮子「ひやぁ、浦島もびっくりや」

○来間島・竜宮城展望台・中
　展望台最上階から見渡して、
宮子「収穫なし。乙姫がっかりや」
竜太「ええように言うな。する？　泥の匂い」
宮子「（鼻を鳴らし）なんも。おーい、いてるかー。宮古に宮子、来ましたでー」

○定食屋・店内

座卓で向かい合う竜太と宮子。

竜太「次のあては？」

宮子「ないよ」

竜太「ないって。『私に任せといて』って言うたやん」

宮子「やいやい言いな、まだ一回表や」

店主のユキヨ（６０）、宮古ソバをのせたおぼんを手に、

ユキヨ「お待たせしましたー」

宮子「ほら、来たで。腹が減っては戦はできぬ」

両手に箸を持ち、一人チャンバラ。

＊　＊　＊

レジで支払いをする竜太と宮子。

ユキヨ、おつりを手渡し、

ユキヨ「大阪？」

竜太「えっ？」

ユキヨ「聞こえたから、お話」

宮子「すんません、この子うるさあて」

竜太「誰が言うてんねん」

ユキヨ「（笑って）観光？」

竜太「いや、ちょっとさがしもんが」

ユキヨ「さがしもの？」

竜太「あの、龍にまつわる、伝承とか言い伝えって、ありますか？」

ユキヨ「龍って、龍神の？」

竜太「ええ」

ユキヨ「うーん、龍だらけよ」

竜太「えっ」

ユキヨ「昔の水場、こっちではガーって言うけど、深い深い穴になってて、見える人がいるね。あと、ここ三十年ほどで、いくつか長い橋がかかったでしょ。横たわる大きい龍ね、あれも。でも、なんで？」

竜太「あっ、えーと」

宮子「かえしに」

ユキヨ「えっ？」

宮子「龍を、かえしに」

ユキヨ「さがしてるのに、かえすの？」

宮子「あっ、ほんまや」

ユキヨ「お帰りはいつ？」

宮子「あさってには」

ユキヨ「うーん、風吹くところに、龍やどる、そう聞くけど、追えば、逃げるからねぇ」

〇走行中の車内

助手席の宮子、ぼそりと、

宮子「なんで言うたんやろ」

竜太「えっ？」

宮子「とっさに出た、龍をかえすって」

竜太「龍だらけ、言うてたな」

宮子「でも、追えば逃げるって」

竜太「で、はしっこの灯台？」

と、カーナビに目を送る。

宮子「そう、島のどんつき、逃げ場なしや」

〇東平安名崎（ひがしへんなざき）

岬の遊歩道。ぐねぐね道が続く。

宮子、足下を見て、

宮子「ここにも龍！」
竜太「よう言うわ、踏んづけといて」
並んで灯台に向かう。
＊　＊　＊
灯台を背にして戻る竜太と宮子。
宮子「ちがうなぁ、ここも」
竜太「はい、次次」

○友利のあま井（ガー）（夕）
森の中の、大きな窪地。
石階段がらせん状に下り、薄暗い地下の水源へ続く。
先を歩く宮子、及び腰で足をとめ、
宮子「うん、ちがう！」
竜太「いや、早い早い」
宮子「落ちたら、龍どころちゃうで」
怖々下をのぞき、手を合わせて、
宮子「たんでぃがーたんでぃ」
竜太「なにそれ？」
宮子「おれい言うてんねん。無事にこさせてくれて、おおきにって」
竜太「こっちの方言？」
宮子「そや。あんたも言い。たんでぃがーたんでぃ」
竜太、あたりを見まわして、
竜太「たんでぃがーたんでぃ」

○ホテル・ビュッフェ会場（夜）
宮子、満足げな笑みで、
宮子「たんでぃがーたんでぃ」

ローストビーフのカットサービス。
皿からはみ出しそうな大判の肉。
竜太「腹ぺこラグビー部か、恥ずかしい」
宮子「元とらな、ねえ」
と、シェフに同意を求め、
宮子「あっ、ソースびちゃびちゃで」

○同・客室（夜）
宮子、ベッドに大の字で、
宮子「あー食べた。余は満足じゃ」
あきれながらも、微笑む竜太。
窓ぎわの椅子に腰かけ、夜風にあたりつつ、島の観光冊子をひらいている。
宮子「三日も休むん、葬式以来やな」
竜太「そやな」
宮子「もう何年や」
竜太「来月で、五年」
宮子「竜太」
竜太「うん？」
宮子「ようやっとるって、みんな言うてるで。お父ちゃんの味を守っとるって」
竜太「うん」
宮子「あとは嫁さんだけやな」
竜太「（苦笑で）またそれを」
宮子「あっ、そや。薬飲まな」
起き上がり、サイドテーブルのポーチから、ピルケースを取り出す。
竜太「血圧？」
宮子、水で飲み下して、
宮子「言うてなかった？」

竜太「何を？」
宮子「腎臓、あんまようないねん」
竜太「いつからや？」
宮子「うん？　ちょっと前。お父ちゃん肝臓で、私は腎臓、似たもの夫婦やな」
竜太「（真剣に）わろとる場合か。なんで言わへんねん」
宮子「言うたら晩ご飯、おかゆさんやろ。でもだいじょぶ、元気もりもり」
竜太「だいじょぶちゃうやろ、肉ばっか食って」
宮子「最後の晩餐や、好きにさせい」
竜太「最後って。そない悪いんか？」
　みぞおちあたりを、やさしくなで、
宮子「曇天の龍が、おるらしいわ」
竜太「……」
宮子「（笑顔で）おかあちゃん、いつまでも元気ちゃうで」
　カーテンを膨らませるほどの強風が、さっと吹き、冊子をぱらぱらめくる。
　驚く竜太、ページに目をとめる。
　聖地の大神島を紹介するカラー記事。

○島尻漁港
　フェリーの券売所を前に、竜太と宮子。
　『高波のため本日欠航』の案内板。
竜太「そううまいこと、いかんか」
宮子「大神島、いかにもやけどな」
竜太「しゃあない、行こ」
　宮子、海に向けて一礼する。

○走行中の車内

助手席の宮子、おだやかな顔で、

宮子「竜太」

竜太「ん？」

宮子「わかった気がする」

竜太「なにが」

宮子「昔三人で、宮島に行ったやろ、広島の。なんかお父ちゃん、かしこまって話してた、島全部が神さんやから、そのつもりでなって。鹿にいたずらしたり、ゴミ捨てたり、きたない言葉つこたら、あかんでって」

竜太「（思い出し）ああ、言うてたな」

宮子「ここもそうちゃう？」

竜太「島全部が？」

宮子「そう、橋でつながった小さい島も全部。だからどこにおっても一緒や。こうやって、いま手ぇ合わせても」

手を合わせ、目をつむる。

宮子「たんでぃがーたんでぃ」

○下地島（しもじしま）・１７ＥＮＤ駐車場（夕）

レンタカーから竜太と宮子が降車。

そばのフェンス越しに、下地島空港の長い滑走路が見渡せる。

宮子「あれ、どこ行きよん？」

フェンスに沿って続く海辺の遊歩道。

十人ほどがばらけて、奥に向かう。

竜太「滑走路の終わりが、海に突き出とんや。名物らしいわ」

宮子「（目を細め）えらい遠いな」
竜太「やめとく？」
宮子「行くで。夜までにお腹減らさな」
大股歩きの宮子、あとに続く竜太。

○同・下地島空港・遊歩道（夕）
竜太を西日よけにして歩く宮子。

○同・下地島空港・１７エンド（夕）
滑走路の終わり、進入灯の桟橋が、６００Ｍほど海中に伸びる。
宮子「すごいな、真下で見れるやん」
竜太「たぶん飛ばんで。カメラおらん」
宮子、見物客の男性に、
宮子「来ます？　飛行機」
男性「あー、今日、ちょっと風がねえ」
宮子「（竜太に）あかんらしい」
竜太、うなずき、人垣から離れる。
滑走路に背を向け、桟橋を眺める。
宮子もそばに来て、じっと眺め、
宮子「これ、見た気がする」
竜太「えっ？」
宮子「昨日の晩、夢で」
竜太「どんな？」
宮子「覚えてない。目ぇさめたら、すっと消えてしまうやつ。でも、じんわり胸のあたりが、あったかいんよ。ええ夢やったよ」
竜太「……」
宮子「あれ、竜太やったんかなぁ」
竜太「えっ？」

宮子「私、空飛んだ気がするんよ。龍の背中に乗って。あれ、どこに向かってたんやろ。ニライカナイかな、死んだあとの」

竜太「まだ、匂いするか？」

宮子、そっと手のひらをかぐ。

宮子「生きとる」

竜太「そうか。しぶといなぁ」

宮子「宮子のミは、不死身のミや」

竜太「（微笑んで）なんやそれ」

宮子「ミサイルの、ミ！」

ふいに手のひらを、竜太の顔に押しつけ、「キャッキャ」言いながら逃げる。

足首をひねり、

宮子「アタッ（片足をかばい）あかん、足つった」

竜太「なにしてんねん」

あきれて近づき、肩を貸す。

宮子「おんぶして」

竜太「えっ？」

宮子「ほら、しゃがんで」

竜太、まわりをうかがい、嫌々従う。

宮子、背中におぶさり、

宮子「出発進行！」

○同・下地島空港・遊歩道（夕）

宮子を背負い、のろのろ歩きの竜太。

宮子「休むか、おぼっちゃま」

竜太「……」

宮子「なんや、怒っとんか？」

竜太「……」

宮子「どないしたん、無口はもてんぞ」
竜太、ふと足をとめて、
竜太「腎臓」
宮子「ん？」
竜太「なんかあったら、片方使いな」
宮子「……」
竜太「腎臓、心臓、それに目ぇも。元々、おかんのもんなんやから」
ゆっくりと歩き出す。
宮子、うれしげに目を細める。
竜太の肩に、そっと頬をあずけ、
宮子「いらん。これでじゅうぶんや」

【完】